

次世代から

時代に合う当たり前を

合田 杏有 大学生

(名古屋市緑区) 19歳

新型コロナウイルスの影響で生活は一変した。休校になり、高校最後の文化祭や体育祭は中止、部活動もふがいない形で引退することとなった。

マスクの着用、不要不急の外出自粛が当たり前になった。何げなく過ごしていた学校生活や部活動、友人との外出がとれただけ幸せなことだったのかを実感した。普段生活している中で当たり前

を幸せに感じているとは難しい。月日が流れるにつれ、当たり前は変化していく。コロナ禍の収束とともに以前の当たり前を取り戻すのを目指すのではなく、時代に合った新しい当たり前をつくる努力をするべきではないか。

人によって当たり前は異なる。十年後、二十年後の当たり前がより多くの人にとって幸せであることを願う。どんな当たり前であっても幸せに感じられる人に成長できていることを切に願う。

夢実現のため収束願う

近藤 花貴 大学生

(愛知県豊川市) 19歳

新型コロナウイルスの感染が国内で広まり始めた時、高校二年生の三学期でした。三年生の日々は休校から始まりました。高校生活で最後となるさまざまな行事は自粛されましたが、先生たちのご尽力により思い出を少しずつ残すことができました。

夢は航空会社で働くことです。そのため大学の英語学科に進学しました。夏からの留学も希望して

います。

ワクチン接種が広まり、コロナの感染者が減少傾向となる中、オミクロン株という変異株が確認されました。

先の見えない未来への不安と学びたい気持ちの交差し、やりたいことの実現の難しさ、これまでの生活がどれほど幸せだったのかを痛感しています。

コロナ禍が早く収束し、夢を実現するための行動ができるようになることを願っています。

2022年1月15日 中日新聞掲載

2021年12月20日 中日新聞掲載